

太宰治の随筆におけるパラテキスト問題

——「日本文学の伝統に根ざす」を中心に

* 小田桐ジエイク

Analyzing Paratextual Features in an Essay Written by DAZAI Osamu

Jake ODAGIRI *

抄録

太宰治の作品をはじめ、実人生、随筆、没後に起こるブームやその人気などがしばしば研究の対象になってきた。また、作品を読解するにあたり、太宰が執筆した随筆を浮き彫りにすることも少なくはないが、随筆をいわゆる原資料として扱う考察は希少である。本稿では、太宰が戦時中に発表した「日本文学の伝統に根ざす」という随筆を取り上げ、従来の研究で重視されてこなかった原資料での形を分析する。現在、個人全集などのような媒体で見えなくなってしまう姿を改めて見ることに、パラテキスト的要素と随筆の本文との関係を明らかにしていく。

キーワード：太宰治、随筆、個人全集、パラテキスト、セルフプロデュース

1. はじめに

日本近代文学の研究領域において、太宰治ほど研究されてきた作家は少ないだろう。例えば夏目漱石や樋口大祐、森鷗外などのような作家と肩を並べるほど、太宰も注目されてきた。従前の研究では、太宰治という作家をはじめ、作品、また最近では多メディアにおける事柄が分析の対象になっている。¹⁾しかし、これほど研究されているとはいえ、本稿の第二節において従来の研究をおおむねまとめていくが、太宰の随筆はこれまでほとんど注目されてきたというわけではない。

そのつこの問題としては、本稿で見えていくように、パラテキストの要素が注目されてこなかったという点がある。すなわち、従前の研究の多くは「定本」という権限を示すような媒体としての個人全集を「資料」としているのだが、原資料まで遡れば翻刻されてきた「資料」

* 筑波学院大学 経営情報学部、Tsukuba Gakuin University

には見えない多くの事柄があり、随筆それ自体の読み方に大きな影響を与えることがある。本稿で扱う随筆がこのような好例となり、現在の「資料」としては「自著を語る」というタイトルになっているが、原資料では「日本文学の伝統に根ざす」というタイトルであった。個人全集の「解題」等においてはこうした情報が明記されているものの、原資料がどのような形となっているのかを詳細に考察するものがまだないのである。

本稿では、まず「ジャンル論」と先行研究における太宰治の随筆の扱い方を整理しておく。これを踏まえた上で、太宰の生前から現在に至るまで随筆がどのようなものだったのかを把握するための全体像を整えていく。このような前提で、実際に太宰の随筆「日本文学の伝統に根ざす」を読んでいく。まずは原資料に提示されている形式でどのようなパラテキストが見えるのかを論じた上で、随筆の中に列挙されている著書及び作品がその随筆の言葉にどのように影響されているのかを明らかにする。このように、本稿の試みを通して、太宰治の随筆を大きく考え直すことができるのではないだろうか。

2、「ジャンル論」及び太宰の随筆研究の背景と問題の所在

「随筆」をジャンル化することは簡単な作業ではない。後にも詳しく見るように、「定本」として使用されている太宰治の個人全集でさえ、「随想」巻の中には「随筆（随想）」をはじめとし、「序文後記」「雑纂」「座談会」「補遺」といった様々な類が収録されていることがうかがえる。本節では、まずは「ジャンル」を理論的に考えた上で、太宰治の随筆に関する研究の現状を確認していく。

そもそも、よく知られているように、「随筆」という概念そのものが中国から輸入され、現代の目で見ると古典類には多く含まれている。

る。例えば『今昔物語』などが「説話」と呼ばれるようになった文献は、もともと「随筆」のようなものとして考えることもできる。中国古代の「随筆」から現在に至るまで、日本で「随筆」がどのように変遷してきたのかについては、稲田利徳論には次のような指摘がある。

一方、日本での随筆の用語の初出は、一条兼良の「東京随筆」であるが、この作品は「書承による説話を集めて分類したものにすぎず、随筆の名に値しない。博識をもつて知られる兼良さえ、随筆がいかなるものか、いかなるものになりうるかについてよく知らなかったこの現れか」とも評されている。

その後、江戸時代になって、随筆という分野が盛行するが、それは随筆文学と称すべきもののほかに、考証・見聞録風な雑多なものを総括的に含み込んでいた。

これに対し、随筆を孤立した文学形態として捉えようとしたのは、近代以降の研究者が文学史の体系化に際し、西欧において発達したエッセイを念頭に置き、形態的、内容的にそれに相応する作品を性格付ける過程においてであったとされる。従って、近代・現代はジャンルとしての「随筆」は江戸時代のそれに比較し、やや限定を伴った、文学的な要素を有するものを対象とする傾向になっている。

ここで読み取れるように、「随筆」は各時代によって異なる意味を持つもので、現在の「エッセイ」に至るまでは定義そのものが大きく変遷してきたことがうかがえる。しかし、日本では明治期に入ってから、西洋文化の影響が普及されるようになるにつれて、「エッセイ」つまり「随筆」は以前より固定した意味を持つようになったとも言えよう。

特に「随筆」というものは、書き手がある種の形式にこだわらずに、個人的な観点や体験を自由に述べる(3)ことができる文章となつてゐることが広く意識されてゐるだろう。しかし、同時に、「随筆」は全く自由な形式で、書き手が何も深く考えずに書かれるものではないという大前提もあるはずで、その意味において自由に読むことも困難なのである。つまり、ジャンルは読む際に枠を与え、読み方と大きくつながつてゐるのである。

ただ、日本近代史において「随筆」はどのようなものだったのだろうか。特に文学者が「随筆」を書く場合は、扱い方がどのように異なつてくるのかを考えなければならぬ。明治初期から多くの雑誌が作られ、「随筆」として考えることができる文章が多く掲載された。例えば、現役の総合雑誌の二つである『中央公論』には「公論」や「時論」、「説苑」、「創作」といったような欄があつたが、次第にこれらが「随筆」としてまとめられるようになった(4)。非常に複雑な歴史を単純化して述べると、明治初期にはジャンルに関する意識が薄かつたが、次第に「説苑(説話)」というものは「創作」と異なつた意味を持つようになり、前者は「随筆」に、後者は「小説(作品)」に変わつていく。

こうしたジャンルと掲載欄との間における揺らぎに関する好例として、内田百閒の代表書物『百鬼園随筆集』(三笠書院、一九三三)があげられる。現在なお『百鬼園随筆集』が刊行されており、書名の通り「随筆集」として扱われている。しかし、中に収録されている三十八点の初出雑誌等を確認してみると、「創作」や「童話」、「探偵小説」などの「随筆」ではない欄に掲載されたこともしばしばあつたことがうかがえる。それぞれの文章がこのようにばらばらだつた理由の二つとしては、内田百閒が作家として活動していた時期に、各雑誌においてはジャンルに関する意識がさほど強かつたというわけではなからである(5)。

このような流れがあるとすれば、太宰治が作家として活動していた一九三〇年代半から四〇年代後半にかけて、「ジャンル」に関する意識が変わつてゐたのだろうか。書誌情報を整理してみると、太宰の多くの随筆はそれにふさわしい欄に掲載されたことが確認できる。例えば、一九三八年八月に発表した「歩前進歩退却」は雑誌『文筆』の「随筆」欄に掲載されている。別の例を取り上げると、一九四〇年三月二十五日に発表した「作家の像」は『都新聞』の「文藝」欄に掲載されたが、後に太宰の生前にも「随筆」としてジャンル化されたことも見受けられる。したがつて、このような状況から分かるように、太宰の場合さえ、ジャンルの揺らぎを見出すことができる。ならば、果たして先行研究ではこのジャンル問題がどのように意識されてゐるのだろうか。

太宰の随筆は従前の研究において全く無視されてゐるわけではないが、同時にさほど重視されてきたものでもない。その二つの原因は、これまで見てきたように、そもそも「随筆」とはどのようなものだろうか、という曖昧な疑問があるからであろう。また、「随筆」は「作品(小説)」とは異なり、いわば物語性が必ずしも必要というわけではないので、学術的に読解することも困難であるうとも言えよう。とはいえ、代表研究としては山内祥史編『太宰治研究』の第17巻から第22巻(7)までは「作品論」随想」という特集が設けられた。合計で二〇五点の論考が収録されているが、いわゆる研究方法論はそれぞれの論者によつて異なり、「随筆」「随想」として論じる場合もあれば、「作品」「小説」として扱う場合もある。また、多くの論考はとにかく「随筆」だから、文章それ自体には生身の作家である太宰治が見出せるという論じ方、すなわち作家論ないし評伝のような方法論も見受けられる。したがつて、このような代表研究でありながらも、ジャンルに関する意識がさほど問題視されていないと言えよう。

このような研究状況を視野に入れつつ、果たして太宰治の「随筆」をどのように読めばいいのだろうか。現在の「随筆」に関する定義を参照することも難しいだろうが、同時に純粹に「作品（小説）」として読むことも難しいとも言えよう。本稿では後に詳細に説明するように、随筆は作品と直接結び付けられ、宣伝ないしリアリティーを付与する機能もあるので、パラテキストの枠に入れて考え直してゆく。しかし、その前に、太宰治の随筆の全体像を把握してゆきたい。

3、太宰治の生前の随筆、現在に至るまでの道程

よく知られているように、「太宰」という名前がはじめて使われたのは作品ではなく、「田舎者」という随筆である。これは一九三三年二月に『海豹通信』という同人雑誌関係媒体での発表であった。同月に、短篇「列車」も発表され、このように「太宰治」という作家がデビューしたことになる。その後、作品だけではなく、太宰は最晩年まで、ほぼコンスタントに随筆を発表していた。おそらく、太宰の随筆の中で、最も知られているものは、『人間失格』（初出『展望』一九四八・六〜八）執筆と同時期に発表した「如是我聞」（『新潮』一九四八・三〜七）であろう。しかも、既に確認してきたように、太宰の随筆は研究の領域では析されているが、一般的にさほど知られていないと言っている。ここで、太宰の生前に発表された随筆を簡単に紹介した上で、現在に至るまでどのように提示されてきたのかを整理してゆく。

しばしば「定本」として使用される筑摩書房版『太宰治全集』第十一巻「随想」に収録されている「解題」によると、多くの随筆は雑誌新聞の「随筆」欄に発表されていた。更に、個人全集に収録されているタイトルとは異なったものが多くあったことも確認できる。

例えば、最初の随筆「田舎者」は同人雑誌関係の『海豹通信』には「田舎者——故郷の話（Ⅲ）」として掲載されていた。個人全集で収録されたタイトルについて、ここで簡単な指摘をしておく、そもそも「正しい」とは何かが非常に重要な議論につながっているのである。もっとも、作家の生前に作品や随筆が単行本などに収録されている場合だと、作家本人が目を通していているので、「正しい」と言えるが、「田舎者」の場合、太宰の生前に初出以外の媒体に改めて収録されることなく、没後に編纂される個人全集にはじめて収録されていた。ならば、太宰の生前に随筆がどのような形で提示されてきたのかをもう少し考えてみよう。

先述したように、多くの雑誌新聞に随筆が発表されたが、太宰の生前に随筆がそのように単独のまままで掲載されていたわけではない。最も早く出版された随筆集は一九四二年十二月刊行の昭南書房版『信天翁』で、中には二十八点が収録されているが、その中の五点は「随筆」ではなく、「作品」である¹⁰。なお、『信天翁』の初版本を細かく見れば、どこにも「随筆集」というような言葉がなく、表表紙及び背表紙には「文藻集」とあり、意味としては「文章の集まり」となる。更に、太宰が随筆「私の著作集」（『日本文学藝新聞』一九四二）の中に、「信天翁」には、主として随筆を収録しました」とあるように、随筆以外に他のものも収録されることが作家自身も分かっていたことがうかがえる。そして、次に出版されたのは、一九四八年三月刊行の若草書房版『太宰治随想集』で、中には五十一点が収録され、そのうちの二点が「作品」である¹¹。

しかし、ある書物に提示されているもの（本稿の場合は「随筆」）以外のものが収録されていることは、特別に珍しいというわけではなかった。太宰の「作品集」に「随筆」が収録されたこともあり、最初は人文書院版『思ひ出』（一九四〇・六）に「餘瀝 近事片々」と

いう随筆集、新紀元社版『薄明』（一九四六）には「随筆二束」、そして用力社版『ろまん燈籠』には「随筆」が作品と共に収録されていることが分かる。ただ、これらの作品集に収録されている随筆はいずれも別の場、すなわち明らかに作品とは異なるものとして収録されている構成となっている。更に、「思ひ出」には無題序文が収録され、太宰は枚数の不足で「昨年四月から、今年三月にいたる間の、時々刻々の随筆を五六、附加した」と述べているように、作品以外の文章が収録される意識があったことが読み取れる。これに対し、『信天翁』にも『太宰治随想集』にも作品と随筆が混じっているという明確な構成がなく、特に前者の場合は作品の間に随筆が入っていることになっている。

これまで見たものは太宰の生前に出版された随筆集であるが、途中で終わってしまった八雲書店版『太宰治全集』（一九四八・四）一九四九・一二）の企画書を参照してみると、太宰自身は二冊にわたって「感想集」というものを考えていたことがうかがえる。ただ、先にも述べたように、この個人全集は未完のままに終わったので、「感想集」は実現できなかったものとなる。また、没後間もなく、新潮社版『如是我聞』（一九四八・十二）という随筆集が出版される。中には、標題随筆をはじめ全部で九点の随筆、そして更に他人の書物のために書いた序跋文も収録されている。

はじめて太宰の随筆が二つの場に集められるのは、一九五二年七月刊行の創藝社版『太宰治全集』第十六卷「もの思ふ葦」である。編集者である津島美知子の言葉によると、当初、「太宰治の文学生活の殆んど全てにわたって書いた随筆をこの二巻に集め、そのおよそ八十篇を、ほぼ発表の順に従って配列いたしました」という旨が読み取れる。この書物には随筆だけではなく、序跋文や追悼文などの文章も含まれ、合計で八十八点が収録されている。この個人全集の無視で

きない特徴の一つは、先述したように、太宰の随筆が二つの場にまとめられていることが、これではじめである。しかし、同時に、個人全集というやや堅苦しい媒体ということを視野に入れると、「一般読者にとっては手出ししやすいものではないだろう」。

次に出版されたのは一九五六年七月刊行の筑摩書房版『太宰治全集』第十卷「随想」である。この個人全集は、太宰治の作品の道程と大きく関わってくる存在となり、現在に至るまで筑摩書房は太宰の個人全集を出版している唯一の出版社である。また、この媒体は先ほど取り上げた創藝社版と同じように、手出ししやすい書物というよりは、専門家や研究者、あるいはマニアの愛読者しか持たないようなものとなっている。

そこで一九八〇年九月に新潮文庫版『もの思ふ葦』が刊行される。「解説」の執筆者である奥野健男は『信天翁』と『太宰治随想集』を取り上げてから、「なぜか全集以外に、その後太宰治の随筆が、単行本、文庫本として独立して刊行される機会がなかった」と指摘している。しかし、この文庫本は全く問題がないというわけではない。むしろ、奥野自身が編集を担当し、「太宰文学の本質を鮮やかに表現している文章、文学史的に欠かすことのできない文章、そして今日の読者になお新しく切実で衝突的な文章を」選んだと言う。すなわち、太宰の作品を解釈するにあたって必要なものが選ばれたというように読み取れる。こうした事柄は読者の解釈に影響を与えることがあり、例えば、随筆なしに太宰の作品を解釈することが難しいというニュアンスも読み取れる。ただ、同時に、文庫本こそが一般読者にとって手出ししやすい媒体になったことは、太宰の随筆がより広く読まれることに大きな役割を果たしているとも言える。

最後に考えるのは二〇一八年六月刊行の柏艸舎版『心の王者 太宰治随想集』という単行本である。収録されているのは二五五点で、

中には従来の「随筆」をはじめ、序跋文、そして随筆集として扱われてきた「もの思ふ葦」「碧眼托鉢」「如是我聞」がそれぞれ別の場で収録されている。全集以外に太宰治の全ての随筆が一つの媒体に収録される点も、この単行本の特徴の一つである。この情報は、実物の本に付されている帯に「表題作『心の王者』のほか、「如是我聞」「もの思ふ葦」など／太宰治の全随想 序文・跋文を収録」として書かれている。更に、同じ帯に「太宰ファンにこそ読んでもらいたい！ 太宰文学の熱き源泉がここにあり」と書いてあるように、既に見てきた奥野健男の解説の言葉とやや重複している。すなわち、太宰の随筆（随想）だけでなく、太宰の文学を読むための重要な情報が入っていると、言うようなニアンスが読み取れる。また、もう一つの注目すべき特徴はこの『心の王者 太宰治随想集』の本文は筑摩書房版『太宰治全集』を「定本」にしたと明記されているのに対し、多くの随筆のタイトルは個人全集に収録されている形ではなく、原資料での形を採用している。だが、その理由は明記されていない。その一つは本稿で論考している「日本文学の伝統に根ざす」であり、筑摩書房版の個人全集では「自著を語る」となっている。

本節では、太宰の随筆は生前から現在に至るまで、その随筆がどのような足跡を残してきたのかを見てきた。雑誌新聞にばらばらの形として発表される随筆が後に『信天翁』や『太宰治随想集』に収録された上で、没後に個人全集などの媒体にも収録されるが、現在、太宰の随筆が個人全集以外に新潮文庫版『もの思ふ葦』には一部として柏嶋舎版『心の王者 太宰治随想集』という二つの媒体しかない。他に注目するに値する媒体としてはちくま文庫版『太宰治全集』第十巻「もの思ふ葦 わが半生を語る 如是我聞 ほか」という書物もあるが、このような全集などの書物での収録については改めて別の論稿で取り上げる。

4、「日本文学の伝統に根ざす」の初出雑誌——媒体とそのパラテキスト

これまでは太宰の随筆の全体像を見てきたが、本節では一つの随筆「日本文学の伝統に根ざす」を中心に考察してゆく。まずは、初出雑誌『月刊東奥』を簡単に紹介してから、太宰の随筆「日本文学の伝統に根ざす」を原資料の形で取り上げる。また、この媒体での



『月刊東奥』1945年1月号「自著を語る」欄

特徴を分析しながら、現在に至るまでこの随筆はどのように変遷してきたのかも確かめておきたい。

『月刊東奥』は東奥日報社という現役の青森県を中心とした報道機関の媒体で、いわゆる総合雑誌である。雑誌そのものは一九三八年四月に創刊号が発行され、毎月の一日に発行され、一九五〇年四月まで続いたものである。中身はそれぞれの号によって異なるが、青森県の芸術文化や風土などを紹介するものとなる。例えば、太宰が『月刊東奥』の編集同人になつていた時期、一九四七年二月号（第九巻第一号）に「巻頭言」として「新しい形の個人主義」という随筆を書いていたが、その号の目次に「詩」をはじめ「短歌」「俳句」「随筆」「小説」とあり、さまざまな類の文章が載せられている。また、太宰は東奥日報社と長く関係を持つていて、はじめて「太宰治」という名前前で一九三三年二月に発表した作品「列車」は『サンデー東奥』という東奥日報社の媒体に載せていた。ちなみに、没後すく、一九四八年八月号の『月刊東奥』に太宰のために追悼特集も設けられた。

本稿で中心に見る『月刊東奥』は一九四五年二月号（第七巻、第号）で、目次を見ると「青森県の米を語る」や「学徒動員の教育的意義」「町の風・村の風」「郷土直情」などのような見出しがあり、全部で三十六ページの幅広い内容から成り立っていることがうかがえる。その中に、「自著を語る」欄があり、太宰と他の二人の名前が載っている。「自著を語る」欄は二六と二七ページ、すなわち見開き二ページ分であり、最初は医学博士 竹村文祥「防空科学近代戦と医学」、その下に作家 太宰治「日本文学の伝統に根ざす」、そして東京慶応大助教授 菊池満輔「日本農業経済計算論」という三人がそれぞれ自分の著書を語る欄となっている。更に、三人の出身地が丸括弧に入り、竹村は「町居村出身」、太宰は「金木町出身」、菊池は「五戸町出身」と書いてある。興味深いことに、それぞれの人の身分、つ

本日本文学

傳統に根ざす

処女作は二十四歳のとき同人雑誌に發表した『思ひ出』―それを含めて出した第一回の創作集が『晩年』です。昭和十一年から私の甘七歳のときになりませうか。尚學を病んだりしてひどく感傷を著して



作家 太宰治

太宰治「日本文学の伝統に根ざす」及び顔写真

いるのに、顔を見たことがない人が多いのではないかと考えられるからである。実際に「日本文学の伝統に根ざす」そのものにも「私の著書の読者もどちかと云ふと東北方面に少く」ということも書いてある。したがって、太宰治という作家のことをはじめて知る読者も多く、更にはじめて顔を見るのもこの雑誌の中だったのであろう。

作家の顔写真はこれまでの研究史にもしばしば注目され、作家のイメージ形成にもつながっているとも言える。更に、同時代にも書物に所載されている太宰の顔写真に関して、荒正人が作品集『富嶽百景』（新潮社、一九四三）を取り上げ、「え、太宰さんで、どんなひとかといふのですか。扉のつぎに「著者近影」といふ写真がでてるでせう、こんなひとですよ」と明らかに作家の写真に注目していることがうかがえる。最終的にこの荒評は口絵写真を「どうだつていいことなですよ」と批判するが、そもそも取り上げていることこそは非常に興味深いも

のであろう。このように『月刊東奥』でも太宰の顔写真が作家のイメージにもつながってくるものであると言える。特に、この「自著を語る」という欄で太宰が多くの作品や書物を紹介する文章の中には、そうした「自著」だけではなく、さほど広く読まれていなかった青森県民にも、執筆者の顔をも見せることができるようになっていく。なお、「自著を語る」欄が実際に『月刊東奥』の中でどのような頻度に掲載されていたのかを改めて確認する必要があるが、少なくとも調査している範囲では『月刊東奥』は写真を多く載せ、読者にイメージを与えながら青森県関係のものを紹介していることがうかがえる。

顔写真についても一つの重要な点は、現在、「日本文学の伝統に根ざす」が掲載されている個人全集などには顔写真が消えている。更に「解題」などにも原資料に顔写真が付与されていたことが言及されていない。個人全集に収録されている「解題」には、例えば「自著を語る」欄では共に竹村と菊池の文章もあるという情報が書かれているが、三人の顔写真も載せられていることは説明されていない。他にも確認できている範囲では本随筆に太宰の顔写真が付与されていたことに関する言及はないようである。このような状況を考慮すると、目録などを見直す必要があるのではないかと考えよう。

更にこの文脈では、タイトルに関する問題もある。本随筆がはじめた個人全集に収録されたのは一九七九年三月刊行の筑摩書房版『太宰治全集』第十巻「随想」の中であり、タイトルが「自著を語る」に改名されている。ただ、書誌参照資料として一九八三年七月刊の山内祥史編『人物書誌体系7 太宰治』（日外アソシエーツ）には本随筆が「日本文学の伝統に根ざす」として登録されている。これに対し、各個人全集の中に収録されている「解題」にある言葉は、いずれも初出雑誌では本随筆のタイトルは「日本文学の伝統に根ざす」でありながら、全集での収録は総題、すなわち「自著を語る」としたと説

明している。また、後の版には随筆が依頼された時の題名が「日本文学の伝統に根ざす」ではなく、「自著を語る」であったので、全集での収録は欄の総題にしたというような説明がある。しかし、どの全集の「解題」においても依頼時の題名が「日本文学の伝統に根ざす」ではない根拠が明記されていない。

興味深いことに、前節で触れたように、柏艸舎版『心の王者 太宰治随想集』の中に本随筆が「日本文学の伝統に根ざす」として収録されているが、そのタイトルを採用した理由は明確に書かれていない。既に指摘したように、本随想集の「定本」が九九九年刊行の筑摩書房版『太宰治全集』ではあるが、先ほど見たように、その中には本随筆が総題の「自著を語る」と名付けられた上で収録されている。実際に比較してみると、本随想集に収録されている多くの随筆等は原資料と同じようなタイトルになっていることが確認できる。こうしたパラテキストがどれほど読者に認識されたのかは不明であるが、個人全集と比較する場合に、原資料のタイトルを使用することには大きな理由があるのではないかと考えられる。特に、「決定版」という権限を有する全集の中で明確な根拠もなく、随筆のタイトルが改名されている理由も気になるだろう。

原資料での姿が後の個人全集や随想集の中になると変貌していることを本節で確認してきた。初出媒体の性格をはじめ、共に掲載された資料、掲載された形、そしてその後がどのような変化をもたらしたのかを見てきた。現在の読者のほとんどは「自著を語る」という随筆の原形が「日本文学の伝統に根ざす」という題であったこと、更に太宰の顔写真が共に載せられたことを知らないだろう。改めてこのようなパラテキストを視野に入れることで、新たに太宰の随筆について考えることができるのではないか。しかし、パラテキストだけではなく、実際に随筆そのものにはどのようなことが書かれているのかを読むことも重要なので、これからその試みを行っていく。

5、随筆を読む①——宣伝の機能

これまでは「日本文学の伝統に根ざす」という随筆の物質的なパラテキストを確認してきた。しかし、パラテキストは必ずしも物質的な要素に限定されているわけではない。場合によっては随筆そのものがパラテキストになることもある。すなわち、文学作品や作家のイメージが直接結びつく内容から成り立つこともある。本稿で扱っている随筆「日本文学の伝統に根ざす」は初出雑誌に所載されている欄である「自著を語る」から読み取れるように、太宰という作家が自身の著書について語るのも、パラテキスト的要素が既に働いていることがうかがえる。本節では、随筆における宣伝の機能をまず解釈していく。随筆の第一行には、宣伝の内容が読み取れる。その部分には自作及び自著のことが取り上げられ、また中には他のエピソードが混じっている。次のようになっている。

処女作は二十四歳のとき同人雑誌に発表した『思ひ出』——それらを含めて出した第二回の創作集が『晩年』です。昭和十一年ですから、私の廿七歳のときになりませうか。肋膜炎を病んだりしてひどく健康を害してゐた私は、当時既に自分の晩年を感じてそんな題名にしたのです。幸にその後すつかり健康を回復しましたが、『晩年』は割に評判がよく、版も重なり、後に縮刷版が出たりしました。

ここで「自作を語る」欄でありながら、まず出てくるのが作品であることが興味深い。なぜかという点、出てくる作品が「思ひ出」という太宰自身がしばしば取り上げることのある作品だからである。¹⁸⁾「思ひ出」は九三三年四・五・七月に同人雑誌『海豹』に発表したも

のだが、「処女作」と言っているかどうかは、同年二月に「列車」、そして三月に「魚服記」という作品を既に発表していたので、随筆の中で「思ひ出」が自分の「処女作」と断言することが作品の位置付けに別の意味や価値を与えることもある。また、「自著を語る」欄でありながら、作品から始まるということがその作品の宣伝にも強くつながるのではないだろうか。そして、そのすぐ後に第二作品集『晩年』が紹介されながら、健康に関するエピソードが混じっており、「当時に自分の晩年を感じてそんな題名にした」という表現は、読者に読ませたい気持ちを感じさせる、宣伝の機能と言っているであろう。これもまた、その続きには『晩年』の評判がよかったので、重版の対象となることも、読んだことがない読者へのアピールとなる。

次に見るのは、本随筆の中にある最も著しい宣伝の部分である。第一作品集『晩年』をはじめ、太宰は多くの著書を取り上げる。少し長い引用になるが、次のように列挙されている。

以来今日迄の著書と云へば既に二十に余るのですが、短編集では『千代女』『東京八景』長編では『新ハムレット』や新日本文藝叢書の『右大臣実朝』『正義と微笑』新潮社の昭和名作選集『富嶽百景』などが受けたやうでした。一番新しいのは『佳日』このなかの編を東宝で『四つの結婚』と云ふ映画にして居ります。最近故郷津軽半島の三厩、今別、龍飛迄、西は深浦から小泊迄、自分にとつては思ひ出の地を遍歴したのですが、それが『風土記津軽』となつて出ることになつてゐます。旅行記めいた風土記です。少々津軽の悪口を書きました。郷里のことを二冊にまとめたのはこれが最初です。処女作の『思ひ出』や『佳日』のなかにある『帰去来』『故郷』など故郷のことを書いた創作もありますが、何と云つても郷里は苦手なんです。

この箇所を簡単に整理すると、まずは列挙されている著書を引き出してみたい。『晩年』は既に取り上げたように、一九三六年六月の砂子屋書房刊行、次は『千代女』一九四二年八月刊行の筑摩書房版、『東京八景』一九四二年五月の実業之日本社版、『新ハムレット』一九四二年七月の文藝春秋社版、『右大臣実朝』一九四三年九月の錦城出版社版、『正義と微笑』一九四二年六月の錦城出版社版、『富嶽百景』一九四三年一月の新潮社版、『佳日』一九四四年八月の肇書房、『津軽』一九四四年十一月の小山書店版という九冊である。注意深く見れば、この随筆の中に列挙されている自著の出版年月は少しずれているが、あたかもその場で思い出しながら語っているかのようになっていることが読み取れる。このような文体は意識的だったかどうかは断言できないが、随筆の後半にあるように、太宰のことをあまり知らない読者に向けているので、堅苦しい文章よりはこのような話し言葉に近い文体にしたことは宣伝の効果につながってくるだろう。

この点が引用した箇所の後半、つまり『津軽』とも深く関わっているのではないだろうか。よく知られているように、『津軽』は太宰が実際に取材旅行をした時の体験をもとに書いた長篇であり、タイトルの通り津軽半島が作中舞台となっている。はじめてこの作品を知る人も青森県民であれば、特に二点は気になるのではないだろうか。一点目は長篇が「旅行記めいた風土記」というジャンルになっている。小山書店のシリーズ「新風土記叢書」の第七巻として出版されていたことを知る読者もいたと考えられ、『津軽』の中身が「旅行記めいた風土記」であるということはどういう意味を持つのかを知るために読みたくなる。もう一点は、その次に出てくる「少々津軽の悪口を書きました」というところである。津軽出身者もこの随筆を読めば、太宰と同じ出身者としてどのような観点から津軽半島の悪口を書いているのかが気になるであろう。

最後に考えるのは、随筆の後半であるが、この中に入っている論語の意味と太宰の解釈を改めて別の論稿で分析したいが、先ほどの考察の続きというところで、自分の「郷里に評判のよくないことは却つて『得』かも知れませぬ」という箇所が気になっただろう。特に、この文章もまた「ね」という終助詞なる話し言葉で書かれていることは、読者の関心を惹かせることもあったと考えられる。そして、続いてくるのは『新釈諸国噺』の出版に関するところで、その作品集が計画された「空襲よみもの」という類で、読者はこれもどのような物語なのか気がなつただろう。随筆の結び段落はタイトルと結ばれ、「日本文学は日本文学としての他の追従を許さないよさがある」という言葉が、戦時中の読者の関心を惹く宣伝の力があつたと考えられる。

本節では「日本文学の伝統に根ざす」という随筆における宣伝の機能を取り上げて考察してきた。注目すべき点としては、まずは列挙される「自著」の数である。実際に随筆の表現には直接の宣伝の言葉がないものの、読者の関心を惹き、紹介される著書に手を出してみたくなる効果があると考えられる。特に、執筆者である太宰も青森県出身者として作家の活動をしているので、『月刊東奥』の読者は共感できるどころ、あるいはなぜ同じ出身者が「日本文学の伝統に根ざす」のかが気になるので、作品を読みたくなる。その二つの宣伝の機能が長篇『津軽』とその紹介の仕方であり、「少々津軽の悪口を書きました」という意味を知りたく、実際に作品を手にしてみたくなる効果があると言えよう。

6、随筆を読む②——関連作品に付与されるリアリティー

これまでは、「日本文学の伝統に根ざす」の中にある宣伝の機能を

解釈してきたが、本随筆にある機能はそれだけでではなく、本節では列挙された作品にどのような形でリアリティーが付与されたのかを考えてみたい。

まず、前節にも引いたところをもう一度ここで取り上げたい。ただ、見る角度を少し変えて、挿入されているエピソードの働きの機能とは何かを考えてみる。

処女作は二十四歳のとき同人雑誌に発表した『思ひ出』——それらを含めて出した第一回の創作集が『晩年』です。昭和十一年ですから、私の廿七歳のときになりませうか。肋膜を病んだりしてひどく健康を害してみた私は、当時既に自分の晩年を感じてそんな題名にしたのです。幸にその後すつかり健康を回復しましたが、『晩年』は割に評判がよく、版も重なり、後に縮刷版が出たりしました。

第二作品集『晩年』のタイトルの由来について太宰が語るの、これははじめではない。例えば一九三八年二月発表の宣伝文らしき随筆『晩年』に就いて⁽²⁰⁾の中では「もう、これが、私の唯の遺著になるだろうと思ひましたから、題も、『晩年』としておいたのです」と解題する。しかし、読んで分かるように、なぜ『晩年』が「私の唯の遺著になる」と思っていたかは書かれていない。ここで注目したいのはエピソードの挿入である。例えば、同じく宣伝文らしいものとして一九三六年一月発表の「『晩年』に就いて」⁽²¹⁾の冒頭部には「私はこの短編集の冊のために、十箇年を棒に振った。(中略)私は、この本一冊のために、身の置きどころを失ひ、たえず自尊心を傷けられて世のなかの寒風に吹きまくられ、さうして、うろろう歩きまはつてゐた」という箇所がうかがえる。更に、『晩年』の成立が「東京八景」という一九四二

年一月発表の作品の中にも、実際にあったエピソードと混じりながら書かれている。このように『晩年』の成立やタイトルの決め方にエピソードを挿入することはどのような機能をしているかという点、それはリアリティーを加えることである。「肋膜を病んだ」のに、随筆の執筆者は作品を出すことを決定し、健康の回復は怪しいので自分の「晩年」と思うようになり、作品集のタイトルを併せたということになる。すなわち、作品や著書を列挙するだけではなく、それらに直接つながるエピソードも挿入することにより、実際に作品の読み方にリアリティーを与えることになるのではないだろうか。

このエピソードが挿入されることにより、リアリティーを与えることもまた、本随筆における『津軽』の成立に関する箇所にも見える。既に取り上げた箇所であるが、津軽半島もしくは青森県民にとって次の箇所は重要なのであるとも考えられる。

最近故郷津軽半島の三厩、今別、龍飛迄、西は深浦から小泊迄、自分にとっては思ひ出の地を遍歴したのですが、それが『風土記津軽』となつて出るようになってゐます。旅行記めいた風土記です。少々津軽の悪口を書きました。郷里のことを冊にまとめたのはこれが最初です。処女作の『思ひ出』や『佳日』のなかにある『帰去来』『故郷』など故郷のことを書いた創作もありますが、何と云つても郷里は苦手なんです。

ここで注目したい点は、長篇『津軽』の中身は「郷里」が中心となるもので、「旅行記めいた風土記」と併せて読むと、作家自身の言葉では『津軽』は虚構作品というよりも実際にあったことをそのまま書いているかのように読み取れる。もちろん、『津軽』を生身の作家である太宰と併読されることが珍しいというわけではないが、このよう

な随筆の中にも『津軽』は「郷里」が舞台で、「少々津軽の悪口を書きました」ということもあり、他の作品も列挙されることで、それぞれの作品には生身の作家の「郷里」も織り込まれていることが読み取れるだろう。

最後に確認するのは、本随筆にある論語のすぐ後の箇所である。リアルタイムで考えてみれば、本随筆は戦時中のもので、一九四五年二月に生活社によって刊行された『新釈諸国噺』が取り上げられることは読者に大きなインパクトを与えたであろう。次の箇所を考えてみたい。

私の著書の読者もどつちかと云ふと東北方面に少く、むしろ関西方面に多いのですが、郷里に評判のよくないことは却つて『得』かも知れませんね。出版会で計画した『空襲よみもの』の二として正月頃『新釈諸国噺』が出ることになってみますが、これは西鶴から題材を借りて創作したものです。

この箇所を二つに分けて読むことができると思われ、前半は論語の解釈という内容になる。前節で論じたように、このような書き方は宣伝の機能を果たしているのではないかと考えられる。つまり、関西方面の読者が多いと主張することで、青森県民の読者にそうした著書を読んでもたたくと思わせる表現である。後半の内容は『新釈諸国噺』が「空襲よみもの」であるが、よく知られているように、『新釈諸国噺』より一九四五年一月の筑摩書房刊行の『お伽草紙』において、いわゆる「空襲」が主なテーマになっているのである。また、『新釈諸国噺』は雑誌発表と書き下ろしとの両方から成り立つ作品集であり、ほぼ二年間にかけて出来上がったものである。序文なる「凡例」には作品集の成立に関する情報もあるが、次の一部が今回の随筆と関わる。

一、けれども私は所詮、東北生れの作家である。西鶴ではなくて、東鶴北鶴のおもむきのあるのは、まぬかれない。しかもこの東鶴あるいは北鶴は、西鶴にくらべて甚だ青臭い。年齢といふものは、どうにも仕様の無いものらしい。

この部の内容から「日本文学の伝統に根ざす」における関西・東北との関係が改めて見えてくる。しかも、「凡例」の内容は随筆の後に発表されたものの、初版本に「昭和十九年晩秋、三鷹の草屋に於て」と書いてあるように、おそらくほぼ同時期に書かれたものなのではないだろうか。また、ここで引用した二箇所のすぐ後に執筆の時期において「日本に於いては、実にいろいろな事があつた」というような書き方で、明確には書かないが、太平洋戦争のことが示唆されている。したがって、『新釈諸国噺』は「空襲よみもの」として宣伝されていないけれども、随筆にある内容と「凡例」にある内容がこういうところで合致している。すなわち、随筆にある表現は作品(群)にリアリティーを与える機能をしていることがうかがえる。

本節では見てきた内容としては、随筆における「自著」(また「自作」)の多くが列挙され、エピソードが挿入されたり、また当時の社会状況が書かれたりすることで、作品そのものにリアリティーを与える機能を見てきた。現在の研究において太宰の作品は虚構性にあふれていることがお議論されているものの、こうした随筆を改めて読んでみると作品におけるリアリティーは作中舞台や出来事、物語だけではなく、作品以外のところからも影響されることが分かる。ただ、ここで指摘したいのは「リアリティー」というのは作品の中に太宰治を見出すという意味ではない。普段、作品だけで読み取ることができないことが外部の場、今回の考察の場合は随筆にあるということを確認することができた。

7、おわりに

本稿では従来の研究において取り上げてこなかった随筆「日本文学の伝統に根ざす」を解釈してきた。はじめての試みとして、そもそも随筆をどのように研究すればいいのかという大きな疑問がありながら、今回の考察ではパラテキストの枠組みに随筆を置くことによつて新たに原資料が随筆それ自体にどのような影響を与えるのかを見直すことができた。「日本文学の伝統に根ざす」には宣伝の機能があつること、そして随筆の中に列挙されている作品及び著書にリアリティーが付与されていることを読んできた。確かにこうした読み方はあくまでその解釈に過ぎないが、随筆の研究とその展望を見直すことができたのではないだろうか。

今後の課題としては、今回取り上げてきた随筆「日本文学の伝統に根ざす」の中で論語が引用されていることも、どのような意味があるのかを考え直す必要がある。太宰はしばしば中国の文献を取り上げることがあり、聊齋志異をもとに翻案作品としては「竹青」(『文藝』一九四五・四)や魯迅の物語を『惜別』(朝日新聞社、一九四五・九)に置き換えたことがよく知られているが、「日本文学の伝統に根ざす」では太宰の論語の解釈を更に考えることができる。また、他に作品や随筆において太宰がどのような中国関係の文献を取り上げているのかをより詳細に分析してみたい。

なお、本稿で見てきた随筆「日本文学の伝統に根ざす」が現在の個人全集では「自著を語る」というタイトルで収録されている事実を視野に入れると、重要な資料としての個人全集などの作成について更なる研究が必要であると思われる。付け加えると、アクセスしやすい電子資料の発展も期待できるのではないかと考えられ、特に原資料を全集などの媒体と比較できるようにすることで、随筆だけでは

なく、文学作品の様々な形を確認し、それぞれの提示されている姿での解釈の可能性が見えるのであろう。したがって、本稿での考察と研究方法論で見出した結果がこのような今後の研究の展望につながってくるのではないかと考えられる。

注

- (1) 更に詳しくは、斎藤理生「太宰治研究の半世紀」(安藤宏編『展望 太宰治』ぎょうせい、二〇〇九)等を参照。
- (2) 稲田利徳「徒然草」における兼好のジャンル意識」(『岡山大学教育学部研究収録』103-1、一九九六)
- (3) この定義は『スーパー大辞林』二〇二〇を参照した上で書いたものである。
- (4) 更に詳しくは鈴木貞美『日記』と『随筆』——ジャンル概念の日本史』日記で読む日本史19、臨川書店、二〇二六を参照。
- (5) 更に詳しくは山田桃子「戦前期『随筆』の流行と内田百閒——『百鬼園随筆』刊行前後の問題を中心に——」(『日本近代文学』101、二〇一九)を参照。
- (6) 『太宰治全集』第11巻「随想」(筑摩書房、一九九九)収録「解題」を参照したが、更なる研究が必要である。
- (7) 和泉書院刊行、二〇〇九〜二〇一四
- (8) 例えば、吉岡真緒「太宰治「如是我聞」論——接続点としての「私」」(『太宰治スタディーズ』2号、二〇〇八・六)では、辞典の定義を参照した上で随筆の直筆資料を検討すると、しばしば随筆で見える「思いつき」がなく、計画的に書かれた文章だと論じている。
- (9) 「田舎者」がはじめて個人全集に収録されたのは、一九七九年三月刊行の筑摩書房版『太宰治全集』第十巻「随想」の中で

- ある。「解題」の執筆者は関井光男である。
- (10) 「作品」として認められているものとしては「雌に就いて」(『若草』一九三六・五)「創生記」(『新潮』一九三六・一〇)「喝采」(『若草』一九三六・一〇)「燈籠」(『若草』一九三七・二〇)「春の盗賊」(『文藝日本』一九四〇・二)という五点である。
- (11) 「作品」として認められているのは「フオスフオレッセンス」(『日本小説』一九四七・七)及び「朝」(『新思潮』一九四七・七)という二点である。
- (12) 『思ひ出』の「餘瀝 近事片々」には「正直ノオト」「春昼」「市井喧争」「酒ぎらひ」「困惑の弁」「知らない人」「心の王者」「鬱屈禍」「薄明」の「随筆」束」には「男女川と羽左衛門」「弱者の糧」「容貌」「六月十九日」「食通」「五所川原」「青森」「校長三代」(或る忠告)「炎天汗談」「横綱」「革財布」「天狗」(「まん燈籠」の「随筆」)には「海」「津軽地方とチエホフ」。
- (13) 太宰自身の直筆資料があり、「感想集」は「第十六(七)巻」及び「第十七(八)巻」となっている。丸括弧にある数字は、実際に手書き企画書にもある。
- (14) この個人全集の成立と出版の詳細に関しては、滝口明祥『太宰治ブームの系譜』(ひつじ書房、二〇一六)を参照。
- (15) 単行本の奥付近くにある「本書の編集方針について」の中に、「本書は『太宰治全集』(筑摩書房刊 一九九九年初版)を定本にした」と書いてある。
- (16) 例えば紅野謙介『書物の近代——メディアの文学史』(ちくまライブラリー80、筑摩書房、一九九二)を参照。
- (17) 荒正人「講座 なにをいかによむか 太宰治『走れメロス』」(『われらの科学』第二巻第三号、一九四六・六)
- (18) 更に詳しくは拙論「太宰治『津軽』における『思ひ出』の引用とその効果」(『日本研究論集』第16号、二〇一七・一〇)や「太宰治の初期作品『思ひ出』のリパッケージ——自作引用・言及の方法」(*Future Japanology* 第二号、二〇二〇・五)などを参照。
- (19) 小山書店「新風土記叢書」と『津軽』の関係に関しては、拙論「変貌する太宰治『津軽』——パラテキストの観点から」(『阪神近代文学研究』第19号、二〇一八・五)を参照。
- (20) 初出は砂子屋書房刊行の雑誌『文筆』の中に「他人に語る」として発表され、『信天翁』に収録される際に、「『晩年』に就いて」に改名された。
- (21) 初出が『文筆』の中だが、後に「もの思ふ葦(その二)」に収録される。
- (22) 初出は『文学界』
- (23) 更に詳しくは松本和也「太宰治の自伝的小説を読みひらく——『思ひ出』から『人間失格』まで」(立教大学出版会、二〇二〇)等を参照。
- (24) 既に個人全集に関する考察がある。例えば安藤宏「個人全集と作家研究——新版『太宰治全集』の刊行に思うこと」(『西洋文化ならびに東西文化交流の研究』一九九二・四)や宗像和重「全集の本文」(小森陽・富山太佳夫・沼野充義・兵藤裕己・松浦寿輝編『岩波講座 文学 1』岩波書店、二〇〇三)などがあげられる。
- 【付記】「月刊東奥」の画像資料は、弘前市立図書館の提供によった。謹んでお礼を申し上げます。